滑り坂論法の基本的な論証スキーマの分析

吉澤　日芙美（Hifumi Yoshizawa）

北海道大学

滑り坂論法（Slippery Slope Argument、以下 SSA）とは、生命倫理の領域、特に中絶や安楽死、遺伝子操作などの是非を問う文脈で用いられる論証の一つである。例えば、児玉（2017）の説明では、「安楽死を合法化すると、死にたくない人までが意に反して安楽死させられるという濫用が生じる。ゆえに、合法化すべきでない」という例が挙げられ、その論証の形式は「ある事柄（A）は、それ自体は望ましいものであるか、少なくとも道徳的に不正だとは言えない。しかし、A を認めると道徳的に不正なこと（B）まで認めざるを得なくなる。ゆえに、A を認めることはできない」というものであるとされる。なお、SSA についての説明は論者によって詳細が異なる。

また、SSA は、しばしば誤謬の一つであると紹介されることがある。SSA には経験的なタイプと論理的なタイプがあるとされ、特に、連続的な概念に明確な線引きはできないと論じる論理的タイプの SSA は誤謬とされてきた。しかし、以下に述べるように、SSA が合理的な推論となるための議論の構造や前提を洗練させる研究がなされている。

Walton（2015）によれば、SSA が用いられるとき、論証に必要な前提が示されていないことがある。そこで Walton は、SSA の基本的な論証スキーマを以下の通り示している。

最初の前提：行為者は行為 A_0 を実行することを考慮している。
連続した前提：A_0 を実行することは A_1 を導き、またそれは A_2 を導き、というように $A_2, \cdots, A_x, \cdots, A_y, \cdots, A_n$ と連続している。
不確定の前提：一連の行為 $A_0, A_1, A_2, \cdots, A_x, \cdots, A_y, \cdots, A_n$ はグレーエリアと呼ばれる $A_x, \cdots, A_y$ を含んでいる。X と Y は不明確な点である。
コントロールの前提：行為者は連続している行為の実行を止めることについて、行為者が $A_x, \cdots, A_y$ のグレーエリア内のどこか不確定な点に到達するまでは、コントロールを保っている。
コントロールの喪失の前提：一度でも行為者がグレーエリア $A_x, \cdots, A_y$ 内の不確定な点に到達すると、行為者はコントロールを失って、A_n に到達するまで行為し続けることを強制させられる。
危機的な帰結の前提：A_n は、可能ならば避けるべき危機的な帰結である。
結論：A_0 は実行されるべきではない。

Walton は合理的な SSA の特徴として、連続する対象のどこかにグレーエリアがあ

ること、ある不確定な点においてコントロールの喪失が生じること、行為から次の行為への推移を促進するドライバーと呼ばれる要因があり、ドライバーが前提としてスキーマに挿入されることを挙げている。提示された SSA がこれらの論証スキーマや特徴に合致するならば、その SSA は合理的になりうるとされる。

以上の Walton の議論を踏まえた上で、Walton（2015, 2017）ならびに鈴木（2008）の説明からすると、Walton の論証スキーマは改訂できる余地がある。というのも、上述した SSA の論証スキーマのうち「連続した前提」に該当する連続する対象は、人や物などの対象物ならびに行為者の行為など、複数含まれることが示唆されるからだ。このとき、一つの SSA に含まれている連続した前提が複数あること、すなわち、$A_0, A_1, A_2, \cdots, A_x, \cdots, A_y, \cdots, A_n$ の連続の他に、$B_0, B_1, B_2, \cdots, B_x, \cdots, B_y, \cdots, B_n$ の連続があることを想定できる。つまり、SSA が滑り坂として展開されていく方向が複数であることが明らかになる。加えて、危機的な帰結としてどのようなことを想定するかによって、SSA の合理性および論駁の難易度が異なることが予想される。

本発表では、Walton の議論をもとに、SSA の基本的な論証スキーマを改訂することを試みる。Walton が示した SSA の論証スキーマは、議論に含まれる暗黙の前提を明示できるため、提示された SSA を分析し、評価するために有用なツールである。この論証スキーマを改訂することで、SSA の提示者が議論のどのような要素に連続性を見出し、どのような帰結を回避したいと考えているのかについて、より詳らかにできるだろう。一方で、論証スキーマがより複雑に改訂されるともいえるため、提示された SSA が合理的であるか否かを判断することは、Walton が想定する以上に困難になるかもしれない。しかし、改訂された SSA の論証スキーマは、SSA の提示者が抱える倫理的懸念を明確にできるため、倫理的課題の解決に向けた建設的な議論を進めていく上で、有用なツールであることに変わりはないだろう。

主要参考文献

Walton, D. (1992), “Slippery Slope Arguments”, Oxford University Press.

Walton, D. (2015), “The Basic Slippery Slope Argument”, *Informal Logic*, Vol.35, No.3, pp.273-311.

Walton, D. (2017), “The Slippery Slope Argument in the Ethical Debate on Genetic Engineering of Humans”, *Science and Engineering Ethics*, Vol.23, pp.1507-1528.

Wibren van der Burg. (1991), “The Slippery Slope Argument”, *Ethics*, Vol.102, pp.42-65.

児玉聡（2017）.「第１章　倫理学の基礎」赤林朗編『改訂版入門・倫理学』勁草書房, pp.22-23.

鈴木美佐子（2008).『論理的思考の技法Ⅱ－三段論法と誤謬－』法学書院, pp.187-188.